

卷頭言

学習する組織としての P2M 学会

国際 P2M 学会副会長 龜山秀雄

2001 年に PMAJ (日本プロジェクトマネジメント協会) より P2M 標準ガイドブックとして公表され、国内に広く普及するようになった。国際 P2M 学会は、この基本構想を継承し、高度な社会ニーズに対応して、システム、開発、マネジメントをコア領域としてイノベーションの推進をミッションとして研究を行う学術組織として 2005 年 10 月に設立された。本学会は、P2M の基本理念の様々な分野での適用事例を検証し、社会の変化に対応して有効性を発揮できるように研究と普及活動を行っている。その活動の成果は、年 2 回の学会で発表され、学術的に優れた研究成果を国際 P2M 学会論文誌に査読付き学術論文として年 2 回刊行している。

P2M の誕生から社会環境は大きく変化し、多様化と複雑化が進み、不確実な要素が増加して行く中で、組織が持続的に発展していくことが難しい状況になってきている。本学会は、そのような社会のニーズに対応するために、P2M の公開から 10 年近く経過した 2009 年に、今までマネジメントの実行領域に限定してきた P2M に、オーナーの視点を明確にし、全社戦略と実行領域の相互関係と事業価値と評価設計の枠組みを導入した新しい P2M の枠組みを構築し、P2M Version2.0 を国際 P2M 学会として発表した。現在、本学会は、この P2M Version2.0 に基づいた活動を続けていている。

2020 年に学会創設 15 周年を迎えるにあたり、再度、P2M の枠組みを社会の変化の状況に照らし合わせて、再構築する時期に来ていると思われる。本稿では常に時代を先取りして P2M を進化させている国際 P2M 学会の組織をピーター・センゲ氏による「学習する組織」(詳しくは、SoL (Society for Organizational Learning) のホームページを参照) の 5 つのディシプリンに合わせて学会の意義を考えてみることにする。

学会のメンタルモデル

会員が観察可能な事実や経験をデータとして学び、学会の生い立ちや特徴から見た

意味付けを行い、仮定を立てて、結論を導く作業を続ける中で、P2M の対象になるとと思われる事象取り込んで、学会のミッションに基づいて活動する組織である。

学会のチーム学習・ダイアローグ

学会活動の中で、互いの会員の考え方に対する理解を深め、互いの意見の背景を探り、会員が提供する多様性から学びながら、学会というチームで考え新たな価値を創造していく組織である。

学会のシステム思考

目の前に遭遇している課題を部分として捉えるのではなく、学会全体における構成要素として捉えて、課題解決の手法の部分の役割と学会全体がなすべきミッションとの関係を考えるとともに、顕在化していない課題を明らかにして、直線的な因果関係だけでなく、結果が原因になるというループ型で因果関係を考えて、生体系のシステムの在り方をモデルにして関係性を見出すことを行う組織である。

学会のパーソナリティーマスター

どのように学会が生まれ、どのように発展してきたかの経緯を学びながら、どのようにありたいかを考えて、どうしたら実現できるかを考える組織である。

学会の共有ビジョン

学会の人々が創造しようとしている共通の将来像を描き、学会の在りたい姿を描いて、ビジョン(達成目標)、バリュー(価値観)、ミッション(存在意義)を会員で共有する組織である。

このように国際 P2M 学会の意味は、ディシプリンに従って未来を創り出す能力を持続的に伸ばしている学習する組織であることが理解できる。

文部科学省の発表によれば平成 31 年から専門職大学が開校する。そこで求められているのは、高度な実践力と豊かな創造力を備えた人材育成である。国際 P2M 学会は、そのような教育に理論と教育人材を提供する組織として今後も社会の要請に応える学会としての発展を期待したい。